
Christmas Night Story

宗像竜子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Christmas Night Story

【NZコード】

N4604P

【作者名】

宗像竜子

【あらすじ】

今日はクリスマス・イヴ。

そんな日に僕は一人、偽者のサンタクロースになっていたけれど…

…?

宗像的には珍しい、男性一人称作品です。

あなたの元にも、本物のクリスマスプレゼントが届きますよつ。

雪が降っていた。

肌を切りつけるような凍えた大気に、人々は身を縮めて足早に歩き去る。

そんな中、僕は真っ赤な衣装を着込み（ちなみに下腹部に詰め物をしていたりする）、顔には真っ白な付け髭。

頭も負けずに白い巻き毛の髪^{かつら}を被つて、その上に衣装と同じ色の三角帽子を乗せていた。

そして肩に担いだ白い^たいた袋。

そんな 多分知り合いが僕を見ても僕だとわからないような格好の僕を指差して、通りがかつた子供が嬉しそうな歓声を上げる。

その母親は子供を嗜めるように、その手を引つ張つた。

『サンタさんだよ！』

『はいはい。でもね、おうちに帰つていい子にしてないとつちまで来てくれないわよ？』

そんな会話でもなされていったかも知れないけれど、あいにく声は僕の所まで届かなかつた。

心残りな顔で引っ張られていく子供は、その大きめの手袋に包まれた手を僕に向かつて振りながら、街の喧騒に紛れていく。手を振り返しながらも、僕は内心ため息をついた。

今日はクリスマス・イヴ。

老いも若きも、仏教徒だらうと神道だらうと関係なく人々が浮かれる日。

そんな日なのに、何故僕はこんな所で一人で偽者のサンタなんかやってるんだろう？

友人達は恋人達とクリスマスを過ごすのだと何とかにやけた顔で言つていたし、当の僕の彼女はと言つと、友達とパーティなのだとか言つて済まなさそうに出かけてしまった。

付き合い始める前からの約束だつたそうで、お人好しな彼女は断れなかつたらしい。彼女らしいと思つたから腹は立たなかつた。

だから仕方なくバイトに行けば、こんな有様だ。うんざりした気分で僕は空を見上げてみる。

街の明かりのせいでか、星一つ見えなかつた。ただ月だけが淋しそうに浮んでいる。

何だか余計に悲しくなつて、僕は今度は声に出してため息をついた。あゝあ。

+ + +

「やあ、こんばんわ」

不意に背後からそんな声をかけられたのは、クリスマスセールのビラ配りのバイトから、そろそろ上がるうかと思つた矢先の事だつた。

振り返ると、そこには見覚えのない紳士風の老人。

豊かな白ヒゲをたくわえた好々爺といつた感じの顔に恰幅のいい体型は、僕よりもよっぽどサンタクロースの扮装が似合ひそうだつた。

「…はあ

どう答えていいのかわからずにそんな生返事を返すと、そのおじいさんはここにこと笑いながら近寄ってきた。

「メリークリスマス！　こんな時に働くなんて」「苦労さんだね」「はあ

またしても生返事。陽気な口調に一瞬酔っ払いかと思つたけれど、酒臭さはなく、鼻の頭が赤いのは単に寒さのせいらしい。

おじいさんは着込んだダークグレーのコートのポケットに手を突つ込んだかと思うと、いきなりその手を僕の目の前に突き出した。

「？」

「そんな働き者の君にクリスマスプレゼントをあげよつー。上機嫌に言い放つたおじいさんの肉厚な掌の上に、一つの小箱。深いグリーンのラッピングペーパーに、目に鮮やかな赤のリボン。いかにも、といったクリスマスカラーだ。

「あ、あの……」

「さ、受け取りたまえ！」

うろたえる僕に、おじいさんは笑顔でその箱を押し付ける。

「これはね、本物のクリスマスプレゼントなんだよ！」

自信満々にそう言って、器用に片目をつぶる。そんな仕草に嫌みがなかつたせいか、咄嗟に反応出来なかつた僕の手にその箱を押しつけると、おじいさんは満足そうに笑つた。

「あの、困りまつ！」

慌てて返そようとすると、おじいさんの好々爺めいた笑顔の中で、その細めの目だけが淋しげな色を浮かべた。

「…もつとも、それを欲しがる人間も随分と少なくなつてしまつたがね」

その瞬間、不意打ちでも受けたかのように僕は言葉を失つてしまふ。

一体その言葉の何に衝撃を受けたのか、自分でもよくわからなかつたけれど、何だか自分の中にある寂しさに近いものがその言葉にあるようない気がした。

「それじゃ、よいクリスマスを！」

おじいさんがそう言つてあつと言つ間に人込みに紛れてしまつたを、僕は結局そのまま見送つてしまつた。

手の中に残された小箱がなかつたら夢かと思つほど、それは本当にあつと言つ間の出来事だつた。

+ + +

「お疲れ」

「おう、またな」

午後2時。僕はようやく偽のサンタクロースの任を解かれた。やはり今日という日を暇で持て余す人々が、疲れた笑顔で見送つてくれる。彼等はこれから飲みに行くとか言つていたが、僕は辞退した。

：悲しいかな、自棄酒したい気分というのに僕は下戸だった。付き合つのは構わないけれど、飲まない人間がいる安心感からか、みんな泥酔して後が大変なんだ。

いくら一人が寂しいからって、イヴの夜を酔っ払いの世話に費やすなんて切なすぎる。

「…寒……」

すっかり人通りの絶えた通りを、早足で歩く。吹き付けてくる北風が身に凍みた。

下宿先のアパートに戻つてヒーターをつけたとしても、すぐには温まらない。しばらくは寒いであろう狭い1Kを想つて、さらに加速度をつけて気分が沈んでいく。

アパートまでバイト先から徒歩20分。学生アパートが軒を連ねるだけあって、コンビニが林立している。

その明かりに誘われてふらふらと中に入り、遅い夕食代わりの鍋焼きうどんを買い込んで、ちょっと雑誌なんかを見てぶらぶらしてみた。

冷え切つた外に比べると、コンビニの中は正に天国だ。少しばかり冷えた身体を温めて、また帰路についた頃には日付が変わろうとしていた。

+ + +

例のおじいさんからもらった箱を思い出したのは、ちょうどビアパートの階段を上っている最中だった。

「あれ？」

「コートのポケットを探つて部屋の鍵を取り出そうとした時に、箱が指に触れた。

取り出してみれば、やはり先ほどおじいさんに貰つた（正確には押し付けられた）クリスマスカラーでラッピングされた箱だ。

「… そういうや何が入ってるんだ、これ？」

ふと浮かんだ好奇心で、その場でラッピングを剥がしながら残りの階段を上る。部屋のある三階に上りきった時にちょうど箱を開く事が出来た。

「… あれ？」

そこには、何も入つていなかつた。

「……」

騙されたのか。そりや、期待なんてほとんどしてなかつたけど。あんなに人が良さそうな顔をしておいて、入つて信用がならないもんだ。

腹は立たず、たださうに氣分が落ち込んだ。僕は一体何処までツイてないんだ。

肩を落としたまま、鍵を探り出し寒い部屋に入る。空の小箱を散らかつたテーブルの上辺りに放り投げた。

そのまま手探りで電気をつけ、明るくなつた所ですぐに石油ヒーターと炬燵こたつもつけた時、まるで待ちかねたように携帯が震えた。

「は、はい？」

『あ、やつと出た』

電話してきたのは、僕の彼女だった。

『何度も電話したんだよ？』

まったく気付いてなかつた。仕事中は音を消す癖があるから時々気付かないんだよなあ。

「…、ごめん…って、何の用だよ？」

反射的に謝りかけて、一いちらが何も悪い事はしていない事を思い出し、僕は彼女に尋ねた。

尋ねながら時計を見ればまさに〇時を過ぎた辺りだった。

『メリークリスマス』

「は？」

『だから、メリークリスマスってばーほら、今日もひ日付変わったから昨日だけど、折角のイヴなのに出かけちゃったでしょ。だからせめて、ね』

言い訳めいた事を早口で言いながら、彼女はむきになつたように言葉を重ねてくる。

『第一、本当のクリスマスは今日なんだしさ』

「…まあ、そりやそうだけど」

僕はと言えば、結局の所こんなタイミングで彼女の声が聞けると思わなかつたので、ばかみたいに間の抜けた相槌を打つ。

「今日は…楽しかった？」

『え？…うん、まあそれなりに』

今度は彼女が適当な答えを返す。何だかもどかしいな、と思つた時に彼女が言つた。

『でもね、本当は一人で過ごしたかったの』

「…」

『だから、ちよつと気分だけでもクリスマスに浸りたかつたんだ。ごめん、こんな時間に電話かけて。今日はバイトだったんでしょ？』

「…そうだけど」

『じゃあ疲れてるでしょ。もう切るね』

やっぱり早口でそんな事を言つものだから、僕は慌てて電話口で叫んでいた。

「ちよつと待つた！…」

『…な、何？』

「僕も、過ごしたかったよ。…ずっとへこんだたしさ」

苦笑混じりそう言つと、彼女が照れ臭そうに笑う声が受話器から

聞こえてきた。

「…何で笑うんだよ、そこで」

『ごめん。だってさ…ふふふ』

それからしばらく彼女の笑いの発作は治まらなかつたのだけども、それまで落ち込んでいた気分は完全に浮上していた。

『…あれ?』

くすくす笑つていた彼女が不意に笑いを收め、不思議そうに尋ねてきた。

『何か、音が鳴つてる? …えっと…ジングルベルかな、これ』

「音?」

言われて耳を澄ますと、確かに何処からともなく聞き覚えのあるメロディラインが。

それはどうも僕の部屋のどこかから流れているようだつた。決して大きくはないけれど、何処か金属的なピーンと耳に届く音。

『オルゴール……?』

電話口の彼女が言つて、あまりその手のものには詳しくない僕もそのようだと判断した。

問題は、だ。

そんなものがあるはずのない僕の部屋から、どうしてそんな音が今になつて鳴り始めたのか、という事。ただ、不思議と恐怖は感じなかつた。予感があつたからかもしれない。

「…うん、オルゴールだ」

音源を確かめて、僕は彼女に答えてやつた。

色んなものが放りだされたテーブルの上に、先ほど放つた小箱が口を開いた状態で転がつている その、はずだつたのに。代わりに掌サイズの小さなオルゴールが、当たり前のように鎮座ましましていた。

不意に思い出す。その箱を押し付けたおじいさんの台詞を。

これはね、本物のクリスマスプレゼントなんだよ……。

もつとも、それを欲しがる人間も随分と少なくなってしまつたがね……。

これで閃かなかつたら、大概の人はばかだろう。とつぐの昔に信じるのをやめた存在。僕が心ならず扮装した人物。

あのおじいさんこそ本物の。

『何でそんなの持つてるの？ 貰つたの？』

素朴な彼女の疑問に、僕は笑つて答える。

腐つっていた僕を浮上させた僕のサンタクロースと、本物の魔法を見せてくれたサンタクロースに思いを馳せながら。「うん。通りすがりの、サンタクロースにね」

t m a s *

* Merry Chri

(後書き)

これも元々は古い作品です。再掲載にあたって、ちょっと現代アレンジしました（携帯とかね・笑）

H Pで初めて音を鳴らした時、プレーヤーの表示の仕方を教えてくれた方に書き下ろしてお送りした作品が元になっています。
男性一人称 + 現代ものという、当時としては冒険（笑）した作品なのですが、割りとすつきりまとまっていて、自分では結構お気入りの作品となりました。

また機会があれば、この手の話にもチャレンジしてみたいものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4604p/>

Christmas Night Story

2010年12月12日17時56分発行